

文化としての農業・文化としての食料(2)

誌名	京都大学生物資源経済研究
ISSN	13418947
著者	末原, 達郎
巻/号	11号
掲載ページ	p. 161-172
発行年月	2006年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



文化としての農業・文化としての食料（2）

－「城壁のない都市」京都の都市農業－

末原 達郎（京都大学農学研究科）

Tatsuro SUEHARA: Culture, Agricultural Basic Complex and Food (2). Urban Agriculture in Kyoto as a Capital City without *murailles*.

Kyoto is one of the oldest cities in Japan. It remained the capital of Japan for 1200 years. The uniqueness of this city lies in its absence of what are called *murailles* or *ramparts* in French (*walls* or *ramparts* in English), by which most of the European and Chinese big cities were, and in many cases still are, surrounded. At the beginning of the history of Kyoto, when it was constructed as Miyako-Kyoto in the 8th century, only one wall was built in the south side of the city. This wall was erected, not as a barrier against enemies from outside, but just as a symbolic boundary.

However, it was this absence of *murailles* that made it possible for the residents of Miyako-Kyoto to change the city's center into agricultural fields during the medieval period. The author considers that Miyako-Kyoto was probably the birthplace of Japanese urban agriculture. In Miyako-Kyoto, unlike in big cities in Europe or China, it was easy to transform a residential area into agricultural land, because of the absence of *murailles*.

Urban agriculture in Miyako-Kyoto, in the city's history of 1200 years, had been flexibly changing its form, according to the changing need of the residents. They needed barley in one era and vegetables in another era. This article argues that agricultural fields had been playing an important role in the history of Miyako-Kyoto. This city should be understood not only as a capital city, but also as an agricultural city.

1. 城壁のない都市

京都は、千年の都である。実際、七九四年に桓武天皇が京都に遷都して以来、一八六九年（明治元年）に天皇が東京へ移動するまで一〇七五年間、京都は平安京として、あるいは単に京（みやこ）として、日本の首都であり続けた。

ところで、千年間もの間日本の首都であり続けてきたことを思えば、平安京であり京（みやこ）でもある京都は、農業とは一見関係がないように見えるかもしれない。しかし、実は、京都は農業都市でもある。

よく知られているように、堀川ごぼう、聖護院かぶ、九条ねぎ、鹿ヶ谷かぼちゃ、壬生菜、賀茂なすと、いずれも京都の地名と野菜名が結びついた、いわゆる「京野菜」が、現在でもたくさん存在している。これは京都が、とりもなおさず、京や都市として存在してきたことと矛盾せずに、農業生産物を提供してきた場所でもあることを、意味している。すなわち、

京都は農業都市でもあり、同時に京都の農業は、都市農業でもある。

しかし、それではいったいなぜ、京都という都市は、農業をその内部に含めることができたのだろうか。そのもっとも大きな理由を、わたしは、京都が「城壁をもたない都市」として成立したことに由来すると考える。

「城壁をもたない都市」とは、いったい何を意味するのか。それは、世界中の多くの都市が城壁をもち、城壁に囲まれた内部に都市を成立させてきたのに対し、京都という都市は、成立の当初から、城壁をもたず、城壁によって取り囲まれていなかったことをさす。

京都はこうした城壁をもたない都市であり、しかも城壁をもっていない都市が、八世紀における成立時から今日の二一世紀にいたるまで、ほぼ原型をとどめながら、存続してきているところに特色がある。このことは、世界の歴史上、きわめてめずらしいことであり、それが京都に都市農業の存在を可能にしたものと、わたしは考えている。

「城壁」の存在は、都市のもつ都市性と強く結びついている。「城壁」とは、フランス語ではmurailles（もしくはremparts）と呼ばれている。スペイン語でもmurallasとなる。イタリア語ではmuraと呼ばれている。英語でこれに匹敵するのは、walls（もしくはrampart）であろう。フランス語やスペイン語、イタリア語のmuraillesや murallasやmuraは、ラテン語のmūrālis（城壁）に由来する。一方、英語のwallは同じラテン語でもvallum（柵、防壁、城塞）に由来する。

たとえば、共和政時代のローマは、すでにその周囲を城壁によって取り囲まれていた。ピエール・グリマルは、以下のように述べている。

前六世紀末頃、エルトリアの勢力が動揺し、ついにエルトリアがテヴェレ川の北部へ撤退したとき、ローマの国民は独立し、ローマ市は自立した都市になった。

ローマ王たちが、その王の一人セルウィウスの事跡とされている巨大な城壁を築造したのは、ほぼこの時期のことである。この城壁は、実際に人口が集中している地域の境界よりもずっと外側に築造されていた。事実、「セルウィウスの城壁」は、伝説に出てくる七丘、すなわち、カピトリヌ丘、パラティヌス丘、アウエンティヌス丘という三つの丘（孤立した台地）の他に、四つのなだらかな丘を内包していた。^(註1)

同様にイタリアの都市ポンペイもまた、城壁によって囲まれた都市であった。先のグリマルは、次のように述べている。

ポンペイは、前六世紀末、原住民のオスキ人によって創建された。文化面でオスキ人は直接近隣のギリシア植民市の影響を受けていた。創建者はギリシア人技術者の方式に忠実であり、まず、完全にギリシア方式で築造された切石積みの城壁で都市の周りを囲んだ。^(註2)

イタリアのいくつかの都市が城壁で囲まれていることは、以上のような記述や、たとえばレオナルド・ベネーヴォロによる記述や地図で明らかである。なおローマは、三世紀の後半に他民族の侵入を阻むために、セルウィウスの城壁の外側に、さらに巨大なアウレリアヌスの城壁を築いている。^(註3)

都市が城壁で囲まれることは、イタリアだけにとどまらず、ローマの他の植民市にも、拡大していった。たとえばフランスでは、

紀元前二世紀末、ローマ人が都市ナルボンヌ（ナルボ・マルティウス）を創建したとき、かつての城市（オビドゥム）は放棄され、新しい都市が取って代わった。^(註4)

アレクサンドリアやパリ、ロンドンなどもその例外ではない。ローマの影響を受けた諸都市の周囲は、城壁もしくは頑丈な壁によって取り囲まれていたのである。

ヨーロッパでは、古代だけでなく、中世においても、城壁を備えた都市の伝統は続く。むしろ、中世の諸都市ほうが、都市の城壁をさらに強固にし、規模を大きくし、完成させていったと考えられる。

たとえば、レオナルド・ベネーヴォロはその著書の中で、中世ヨーロッパ、特に十四世紀まで続いた14都市の図をあげている。また、「中世初期の防備を施した都市」を「ブール（城塞都市）」とよんでいる。^(註5) この中には、パリ、ロンドン、ケルン、アントウェルペン、ブリュッセル、ルーヴァン、ブルージュ、メケレン、リエージュ、ナミュール、ティーネン、イエペル、ディナンが含まれており、そこには、見事に城壁に囲まれた都市の存在が地図として示されている。

一方、ヨーロッパからアジアへと目を転じてみよう。京都すなわち平安京が直接モデルとしたのは、中国の洛陽や長安であった。しかし、モデルとなった六世紀の洛陽や長安とは異なり、京都は「城壁」をもたない都市であった。このことを、たとえば井上満郎は以下のよう指摘している。

（平安京が、長安・洛陽とは異なる点としては）「第三に、城壁は平安京にもあったが、長安のようにその周囲をとりまいてはいなかった。南側のみになかなく、実際には城壁としての役にはたっていなかった。形式的にもうけられただけで、首都を防御するという役目はたさなかつたのである。中国王朝は、歴史上、たえず内乱と異民族の侵略に悩まされてきた。首都は国家の中心であるから、防御は厳重で、高さ五メートルにもおよぶ城壁で囲まれていた。」^(註6)

しかし、農業と都市という視点から見ると、平安京、のちの京都が城壁によって周囲を取

り囲まれなかったことの意味は大きい。それは、都市と農村を隔てるものが実体としては存在しないことを意味するからである。城壁がない場合には、理念的に都市と農村の境界は存在していたとしても、実際には、都市は容易に農村になりうるし、逆に農村もまた都市になりうる。すなわち、都市は農村と対立する概念ではなく、時代によって境界は意味を変え、両者は変動し、場合によっては入れ替わりうるものとなりえたのである。実際、京都の歴史は、そのことを示しているとわたしは考える。以下、より詳しく論じていこうと思う。

2. 京都には、本当に「城壁」がなかったのか

ところで、京都は本当に「城壁がない都市」であったのかどうかという点を、もう一度検証しておく必要があるだろう。歴史的にみると、平安京の当初から、京都は城壁らしきものをもっていなかったが、ある特定の時代だけ、京都もまた、「城壁らしきもの」が造られた時代がある。

ひとつは、室町時代・戦国時代に造られた惣構（そうがまえ）である。応仁・文明の乱の東陣、西陣に由来する御構（おんかまえ）が、戦国期に入ると惣構へと発展する。同時に、上京と下京がそれぞれ別の惣構をもち、それが室町通によって連結されていた。河内将芳は以下のように論じている。

なかでも戦国期京都が一種の城塞都市化していた様相が洛中洛外図屏風によって確認されている。しかも「花の都」というわりには、意外に田畠や農作業風景が随所に描かれている。（中略）

戦国期京都は惣構とよばれた堀や塀で城砦化された、上京と下京という二つの地域を中心に成り立っていた。この上京・下京のまわりの空閑地には、田畠が広がり、南北に通る室町通りだけがこの両地域をつないでいたのである。ちなみに、天皇・上皇の住む御所、内裏もまた戦国時代は田畠の中にあった。

大裏は五月の麦のなか、あさましとも、もうすにもあまりあるべし
これは連歌師、宗長が長旅からの帰途、粟田口からみた京都の姿を記した『宗長手記』の一節であり、洛中洛外図屏風の風景とも符合しているといえよう。^(註7)

河内の指摘は、実はかつての京、京都を全体として捉える視点にたてば、都市の一部が田畑になっていることを示していると見ることができる。惣構として城砦化されたのは、京都の一部であり、京都全体としては、都市部と農村部の範囲が入り混じっていたと考えるべきではなかろうか。内裏が田畑の中にあるというのは、そのことを如実に物語っているように思えてならない。

京都における「城壁らしきもの」のいまひとつは、桃山時代に造られた「御土居」と呼び

習わされているものである。御土居は、ほぼ京都の市中を一巡していた。現在でも御土居の一部が残っている。その姿は、鷹峰や北野神社に残っている「御土居」の姿を見ると、その実体がよくわかる。豊臣秀吉によって造られたこの「御土居」は、実際には「城壁」とはとも呼べそうもない、土塁状のものにすぎない。また、「御土居」は、防壁としての機能よりも、象徴的な意味での機能であった時代のほうがはるかに長かった。^(註8)

いずれにしても、「惣構」も「御土居」も、当時のヨーロッパや中国におけるような、都市を防御する堅牢な「城壁」や「羅城」の概念とは、異なるものである。したがって、京都にはその当初から、世界の都市史の中で用いられているような、いわゆる「城壁」は存在しなかったと考えてよいと思う。

第二に問題となるのは、京都以外の日本の都市や京（みやこ）もまた、「城壁」のない都市ではなかったか、という点である。平安京に遷都される以前の長岡京や、恭仁京、平城京もまた、城壁がない都市ではないか、という問いかけである。

たしかに、平城京をはじめとして、長岡京などの京（みやこ）もまた、「城壁」をもった都市ではなかった。たとえば、長岡京を例にとってみることにしよう。この京は、遷都されてからわずか十年足らずで、桓武天皇によってさらに平安京へと遷都されてしまう。それ以降、この地は京もしくは都市としての機能をはたさないままに、現代に至っている。ひとつには、長岡京建設の途中で平安京への遷都が始まってしまったことが、それ以降の長岡京の、都市的機能を失わせていった理由であろう。建材や石材もまた、平安京建都の材料に供せられたことにも原因がある。

しかし、最も大きな理由としては、「城壁」を兼ね備えていなかったことにこそ、長岡京が急速に農地へと変貌を遂げた理由であると考えることができる。長岡京は、これ以降はもはや都市というよりも、都市近郊農村として存続してきたのである。^(註9) ごく近年にいたるまで、長岡京の地は京都の都市近郊農村地帯であり、畑や田が数多く存在した。もちろん現在は、京都のベッドタウンとして再編成されつつあるが、それでも農地は少なくない。

おなじことは、長岡京ほど極端ではないが、平城京についてもあてはまることである。かつての平城京のごく一部が、現在の奈良市として存続してきているにすぎない。平城京の大部分は、遷都されて以降は、旧の京（みやこ）の上に農地が造られ、豊かな田や畑として再利用されていたのである。このように考えると、日本ではかつての京（みやこ）の多くが、田や畑などの農地に逆戻りする可能性、つまり可逆性をもっていたことになる。

万葉集にも次のような歌がある。

古りにし人に吾あれやささなみの故き京を見れば悲しき

ささなみの國つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも

いずれも、かつての京（みやこ）であった大津宮の荒廃を悲しんだ歌である。^(註10)

もちろん、世界中の都市の中で、かつては栄光の都市文明を花咲かせたところが、現在では農地として姿を変えてしまっている例もある。あるいは、野草におおわれてしまっている例も少なくない。しかし、日本の京の多くが、世界の都市と比べてもこれほど簡単に農地へと転化していることを考えると、その理由のひとつとして、日本の京には「城壁」が存在しなかったことを指摘しておくことができるだろう。

ところが、京都は、「城壁」がなかったにもかかわらず、京として、さらに明治期にいたるまでは日本の首都としての機能を存続し続けたのである。ここに、京都の特色がある。これらの点は、平城京や長岡京とは、まったく異なる特色である。

京都の後に成立した江戸は、当初は都市でさえなかったが、その後、江戸幕府の実質的な行政上の首都としての役割をはたし、都市としての完成をみることとなった。江戸もまた、「城壁をもたない都市」であった。より正確には、「城壁」に囲まれているのは、江戸城とその内部だけであり、この中には庶民の生活は存立していなかった。わたしは、江戸もまた「城壁」のない都市だと考えるが、京都には、江戸城に匹敵する「城壁」すら、存在しなかった。この点で、京都こそ「城壁のない都市」として位置づけるにふさわしいだろう。京都は都市性をもちながらも、「城壁」をもたず、したがって、都市性を危うくする要素を常に内部に秘めながらも、都市として成立し続けてきたのであり、そこに、京都の独自性があったと考えられる。

3. 都市内部にみられる農業

以上のような考察を積み重ねてきたのは、京都という都市と、農業との関係性を見ておくための前提となる条件を検証しておくためであった。

京都は、平安京として成立して以降、都市の中心部をわずかずつ移動させていった。

当初の平安京は、大内裏を中心として、そこから朱雀大路が南に向かってはしっていた。南には九条大路が東西に続き、その中央には羅城門が、さらに少し離れてその左右に東寺と西寺が位置していた。

東端には東京極大路が一条通りまで続いていた。東京極大路は現在の河原町通りに近く、またその東側にはすぐに鴨川の流れがある。一方、西端には西京極大路がこちらも一条まで続いていた。西京極大路は、ほぼ現在の葛野大路近くを南北に通っており、現在もその西側には天神川が流れている。

平安京の中心を貫く朱雀大路は、ほぼ現在の千本通りと重なる。朱雀大路は、南は羅城門から市外へと出、鳥羽の作り路を経て、鳥羽離宮へと続いていた。北は、現在の二条通り付近で大内裏にぶつかり、そこから北はいわゆる御所の内（大内裏）になっていたことになる。現在の御所は、烏丸通りと寺町通りの間に位置し、南北は今出川通りと丸太町通りの間に位

置していることからわかるように、平安京の中心たる大内裏（御所）そのものも、時代を経て、二キロほど東へと移動しているのである。

平安時代、鎌倉時代、室町時代を経て、京都の中心部は、徐々に東へと移動していく。ということは逆に、かつての平安京の内部、中でも西側（右京）の地域では、都市の住宅地としての役割は徐々に機能しなくなっていったことを、意味する。同時に、東にシフトした先の、今でいう左京や東山の地にも、寺院や公家衆の家屋や別荘地と併存して、その周囲には多くの農地や農村が存在していたことも事実である。

しかし、このことがただちに京都に農業を生じさせることにはつながらない。むしろ、平安京はその当初は特に都市性を強くもち、住人の多くは「京戸（きょうこ）」として位置づけられ、平安京の内部に農地を持つことを許されず、その代わりに平安京の周囲や外部に農地を持つことが認められていたのである。瀧浪貞子は以下のように書いている。

平安京で宅地班給を受けるには京中住民として戸籍に登録されていることが必要であった。この手続きを京貫といい、登録されて新京の住人となったものを京戸という。ただし誰もが京戸になれたわけではない。対象は平城京や長岡京といった旧都の住人が優先的であり、なかでも貴族官人たちが最優先された。というのも新京への居住が義務づけられたのは五位以上の貴族たちだったからである。六位以下の下級官人や庶民の場合は希望にまかせ、強制はしていない。役所づとめだけでは経済的に自立できないため、彼らの多くは農繁期には田舎で農業生産に当たるといふ二股生活を余儀なくされた。いち早く都市化した貴族とは対照的である。^(註11)

平安京は、当初においてはこのように、農業を行なわない場として想定されていた。農地は都市の中ではなく、その外部に設定されていた。それにもかかわらず、京の都市内部に農地が存在し始めたのは、なぜだろうか。瀧浪貞子はさらに以下のように、論じている。

平安京住民のすべてではないが、六位以下の下級官人を含め、京戸には口分田が与えられていた。これを京戸田というが、その点では農村部の公民と基本的には変わらない存在であった。

ただしその口分田は多くの場合、京中（居住地）から遠く離れた土地に班給された。京中では口分田の所有をみとめないのが原則だったからだが、それでは十分な経営ができるはずがない。その結果、京戸田は早くから衰退し、そのために農業を捨てて寺社や貴族に仕えるか、あるいは商人か職人となって商工業に従事するか、生活様式の変化を迫られた京戸も少なくなかった。しかしその一方で、右京では水田化が進み、その耕作に専念する京戸が増加していったことも事実である。すでに弘仁十年（819年）、条件つきではあるが、希望者には京中の閑地を耕作することが認められている。^(註12)

弘仁十年といえ、平安京への遷都後、わずか25年である。千年の都平安京は、わずか25年にして、農地を都市の内部に抱え始めていたことになる。

ここで、有名な『池亭記』における記述を見てみよう。作者は、慶滋保胤（よししげのやすたね）である。書かれたのは天元五年（983年）である。平安遷都から200年近くたっている。関連部分を村井康彦の現代語訳に基づいて記してみる。

鴨川べりや北野には、人家が立てこんでいるだけでなく、田畠があつて耕作し、川をせきとめて田に灌漑している。ところが毎年洪水があつて堤防が切れている。そのため防鴨河使はいつも仕事が待っている。これでは洛陽の人は魚とかわらない。鴨川の西辺は崇親院に耕作が許されているだけで、ほかは水害の恐れがあるために禁断されており、鴨東や北野は天皇が時を迎える場であり行幸の地であるのに、どうして役所は耕作を禁止しないのであろうか。こうして人々は都の外に争って住むようになる一方、都のなかは日々衰えていく。四条坊門の南側はいまは一面に荒れはてて、麦だけがよく実っている。わざわざ人々は、肥えた土地を去ってやせた所に行く。^(註13)

このように京の内部では、田畑が造成されていたことが記されている。しかも、四条坊門では、麦が栽培されていたというのである。これは、まさしく都市農業といえるだろう。都市の内部に、住民の必要性から農地が造成され、同時に、住宅地は都市の内部から外部へと移動していく。平安京が城壁をもたず、理念上の都市の境界しかもっていなかったがゆえに、実体的な都市は移動し、理念上の都市は田畑へと転換しているのである。

平安時代から始まった都市の農地化、あるいは農業都市化は、鎌倉、室町、戦国時代に至るまで、存続し続けている。

このことは考古学的な調査からも検証されてきている。藤田勝也によると、

右京四条四坊一五町では人・牛の足跡を伴う水田遺構を発掘、一一世紀後半、牛馬の飼料用に検非違使に草を刈らしめた「田三百余町」も右京である。^(註14)

右京四条二坊六町では平安時代前期において、西負小路に東面する北東部に複数の掘立柱建物や井戸を擁する四分の一町以上の宅地が存する。しかし、平安時代後期－室町時代にはすべて廃絶・耕地化する。^(註15)

以上のように、室町時代末期まで、都市の中心部、特に右京においては四条二坊、四坊でさえも田畑化が進むことになる。

戦国時代には、前述したように豊臣秀吉によって造成された御土居が市中を取り囲むことになる。ただし、この場合、御土居によって取り囲まれた地域は、必ずしも本来の京とは一

致していない。特に、右京においては、道祖大路より西側は、ほとんど御土居の域外に出てしまっている。また南部においては極端にその面積は狭くなり七条から九条にかけては東寺周辺部に限られている。これに対し北側には大きくひろがり、鷹峰から紫野、上野、萩野など広い地域が含まれている。これらの地域のうち、紫野、上野、萩野などでは、多くが農地である。さらに、御土居の内側においても、千本通りより西側には多くの畑地が存在している。^(註16)

特に、元和六、七年（1621年、1622年）もしくは寛永元年（1624年）の作と推定されている「京都図屏風 四曲一隻」^(註17) においては、二条城と聚楽の西側一帯は、畑として描かれており、十七世紀初期における京の市域に、多くの農地が含まれていたことを示している。この傾向は、寛永、元禄、天保と時代を経るにしたがって少しは屋敷地が増えるが、全体的な傾向は変わらず、江戸末期の慶応四年製の「改正 京町御絵図細見大成一洛中洛外町々小名全」においても、二条城より西側の南域はあいかわらず畑のままである。

4. 考 察

本論では、主として「都市性」と「農業」について、京都を例として考察を重ねてきた。都市の内部には、農業が入り込む余地があるのか、否かという視点である。農学におけるこれまでの議論では、「農村と都市」とは異質なものとして、対立関係のなかでとらえられることが多かった。もちろん、「都市と農村という対立」が存在しないということが本論の目的ではない。

そうではなくて、「都市性」と「農業」という視点からとらえなおすと、両者はかならずしも対立関係にあるわけでもなければ、矛盾するものではないことを指摘したのである。西欧、特にヨーロッパにおける「都市性」と「農業」とは、本論前半で考察したように、対立したものとしてとらえることが妥当である。特に、都市が「城壁」という、物理的区分をもった場合には、都市性と農業は、しばしば異質な、対立する存在として現出される。西欧の多くの都市、特に植民都市の場合には、このカテゴリーがよくあてはまる。

しかし、日本の都市においては、特に古代から存在する京（みやこ）という計画都市においても、「城壁」が存在しなかった。このことによって、「都市」は農地へと容易に転換することができ、逆に、「農地」も都市へと簡単に移行することができたのである。

このことは同時に、「都市」はその内部に農地を含みこみ、都市である京は、農地にも拡大し、もしくは移動していくことをも意味する。本論の後半部では、京都という千二百年余りの歴史を持った日本の都市に、その具体的例を見てきたことになる。この考え方の基本には、都市としての京都を国際的比較のフレームワークにのせて考えようという視点がある。

わたしの論点の出発点となった思考の基盤は、現代アフリカ、特にサブサハラ・アフリカのいくつかの都市で見られる、都市の内部に構築された農業を示すUrban Agriculture^(註18)と

いう概念である。サブサハラ・アフリカの諸都市を見ると、都市の内部に農地が作られ、その農地が都市住民の生活の糧としての食料を、相当程度支えていることがわかる。植民地政府によって造られた都市とは異なる、地元の住民側が造りだしてきた都市には、このように「都市性」と「農業」が、矛盾することなく存立している場合が少なくない。

もちろん本論で、日本の都市とサブサハラ・アフリカの都市農業の比較についての、早急な結論を出そうとは考えていない。むしろ、比較農史農学というフレームワークを組み立てる際には、西欧一辺倒との比較とは異なる、別の視点、もうひとつの視点が必要であることを強調したかったからである。そうした研究の例が、歴史学や地理学の中でも、最近になって多く出てきている。

筆者は前回、「文化としての農業、文化としての食料(1)―ブラシカ (Brassica, L) を中心として―」^(註19)において、京都周辺における野菜としてのカブの生産がどのように移動していったかをあつかってきた。そこでは、農業生産と都市性が密接につながっていることを示唆した。一方本稿で述べたのは、京都という京における「都市性」と「農業」との別の意味での密接な関わりあいである。西欧の都市と京都を「城壁」という概念をキーワードにして、比較分析を試みた。本論で扱っている材料は、歴史学、地理学、都市工学、考古学、人類学、経済学、経済史学、農学の各分野からの研究データに広がっており、わたしの専門領域を超えた材料を、取り扱う必要があった。このことに関しては、京都大学大学院工学研究科および文学研究科の何人かの教授に直接ご意見を聞かせていただいた。お名前はあげないが、記して感謝したい。ただし文責は、ひとり私自身にある。当然ながら、多くの問題点やまちがひも存在していると思う。ご指摘があれば、謙虚に受け入れたい。

また、1990年代から2000年代にかけては、実に多くの都市に関する資料が出版され、専門家以外でも、手にして見ることができるようになった。特に、都市地図と考古学資料の報告書に関しては多くの出版が積み重ねられ、ようやくわれわれ専門外の研究分野の研究者にとっても利用できるようになってきた。さらに、世界規模での植民都市の研究も、最近多くの成果をあげている。本論文もまた、間接的にはあるが、これらの研究の刺激を受けている。^(註20)

最後に研究を進めるにあたって、永井研究助成基金「ポスト・グローバリゼーション時代に向けた地域社会のアイデンティティ形成」(研究代表者：末原達郎)による援助をえた。記して、感謝したい。

注

- (注1) ビエール・グリマル、北野徹訳、『ローマの古代都市』、Pierre Grimal, *Les Villes Romaines*, Presses Universitaires de France, Paris, 1990, 白水社、東京、1995、p.33。「セルウィウスの城壁」は、実際にはセルウィウス（もしくはセルヴィウス）が治世したと考えられる紀元前六世紀（BC579～BC534）のものではなく、紀元前三世紀のものであることが、最近の考古学的研究によって明らかになっている。
- (注2) ビエール・グリマル、北野徹訳、同上書、p.30
- (注3) 同上書、p.93
- (注4) 同上書、p.6
- (注5) レオナルド・ベネーヴォロ、佐野敬彦・林寛治訳、『都市の世界史2—中世』、相模書房、東京、1983、p.45
- (注6) 井上満郎、『平安京再現—京都1200年の暮らしと文化—』、河出書房新社、東京、1990、p.18。ただし、括弧内は筆者が追加した。
- (注7) 河内将芳、「第2章第6節 洛中洛外と上京・下京—洛中洛外図の世界—」、村井康彦編、『京都学への招待』、角川書店、東京、2002、p.84
- (注8) 中村武生によれば、御土居堀を京都の城壁の一部として認めている。中村武生、『御土居堀ものがたり』、京都新聞出版センター、京都、2005、p.48、p.106—107。また、中村は、御土居を堀と一体化して「御土居堀」として認識すべきだという概念規定を提案している。さらに、御土居の上には竹林が密生し、単なる城壁とは異なり徳川時代には竹やぶとしても認識されていたことを指摘している。中村武生、前掲書、p.24—26、p.75。
しかし、わたし自身は、「御土居」が世界的に言われている「城壁」に相当するとは考えていない。「城壁」はいわゆる「塔」や「門」をつなぐ形で建設されているのが一般的で、そのような防衛拠点としての「塔」や「門」をもたないと、「城壁」としての戦闘時の防御能力は、極端に落ちてしまう。「御土居」には、このような戦闘時の拠点としての「塔」や「門」をあわせもっていないところに特徴があり、「城壁」と位置づけることには、無理がある。
- (注9) すでに平安時代中期に記録された『伊勢物語』第五十八段に、長岡を都市近郊農村としてとらえている記述がある。堀内秀晃、秋山虔校注、『竹取物語、伊勢物語』（新日本古典文学大系17）、岩波書店、東京、1997、p.131-132
- (注10) 佐佐木信綱編、『新訓万葉集 上巻』、岩波書店、東京、2005、p.52
- (注11) 瀧浪貞子、「第1章第2節 平安の新京—藤原京・平城京・長岡京、そして平安京—」、村井康彦編、『京都学への招待』、角川書店、東京、2002、p.24-25
- (注12) 同上書、p. 26
- (注13) 村井康彦、「第5章 平安京と貴族政治」、『京都の歴史1—平安の新京—』、京都市編、学芸書林、東京、1970、p.484、原文は、佐竹昭広、久保田淳校注、『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系39）、岩波書店、東京、1989、p.38-39
- (注14) 藤田勝也、「1 平安京の変容と寝殿造・町屋の成立」、鈴木博之・石山修武・伊藤毅、山岸常人編、『古代社会の崩壊』、東京大学出版会、東京、2005、p.20
- (注15) 藤田勝也、同上書、p.22、および京都市埋蔵文化研究所、「平安京右京四条二坊」、『昭和六二年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都市埋蔵文化研究所、京都、1991
- (注16) 『慶長昭和 京都地図集成』、柏書房、東京、1994の内の、「京都図屏風」、p.9—10、「寛永十四年洛中絵図」、p.15—26、「元禄十四年実測大絵図（後補書題）」、p.48—56、「改正 京町御絵図細見大成—洛中洛外町々小名全 天保二年辛卯 竹原好兵衛刊」、p.83—87、「改正 京町御絵図細見大成—洛中洛外町々小名全 慶応四年戊辰 竹原文叢堂」、p.90—95、「京町御絵図—洛中洛外町々小名 明治二年巳御改正 御用書林 村上勘兵衛」、などによる。
- (注17) 『慶長昭和 京都地図集成』、柏書房、東京、1994、p.8

- (注18) Donald B. Freeman, *A City of Farmers: Informal Urban Agriculture in the Open Space of Nairobi, Kenya*, McGill-Queen's University Press., Tronto, 1991、など。
- (注19) 末原達郎、「文化としての農業、文化としての食料(1)ーブラシカ (Brassica L.) を中心としてー」、『京大生物資源経済研究』第10号、2005、p.1-13
- (注20) 布野修司編、『近代世界システムと植民都市』、京都大学出版会、京都、2005、鈴木博之、石川修武、伊藤毅、山岸常人編、『シリーズ 都市・建築・歴史 (全10巻)』、東京大学出版会、東京、2005、西山良平、『都市平安京』、京都大学出版会、京都、2004、など。

(受理日 2006年1月12日)